

作 川口幸宏

知的障害を持つ子どもたちの教育を切り開いた人の自立への旅



第3回

先生様、パリに学ぶ



クーランジュのセガン家の末っ子ジャック＝オネジムさん、つまり後の先生様はベルトランさんによって、ラテン語、ギリシャ語をはじめとして、ハイソな家庭の出身にふさわしい教養の基礎をみっちりと仕込まれます。それだけでなく、医学の手ほどきも受けました。

左の図版は当時の家庭教師の一般像。今、「カテキョ」

などと軽く言われるのとは大違いで、威厳があり、専門的教養も深かったのです。もともとは王侯貴族の専属のお抱え教師に発していますが、ブルジョアたちも王侯貴族にあやかろうとしたわけですね。ベルトランさんはこんなカッコをしていたのではないでしょうが、家庭教師の一つのイメージのために登場してもらいました。そうそう、ちょっと先の話なんですが、セガンも、パリに出てから家庭教師をして食いつないで？いたようです。いや、ぼくはそのように推測している

のです。その話はまた後で。

先生様はパリの医学校に進みます。医学校と言えばフランス南部のモンペリエの医学校も歴史と伝統を誇っておりまして、優れた医学者を多数輩出していますから、そちらを選ぶことも可能性としてはあったと思うのですが、材木商、実質は薪商人を営むクーランジュのセガン家にとっては、パリは非常になじみ深い都市でしたので、その関係でパリに出たのかもしれませんが。パリまでおおよそ200キロの道のりがあります。

まだナポレオン第一帝政による学制改革が為される前ですので、大学の医学部ではありません。この当時のパリ医学校は、1. 解剖学・生理学、2. 医化学・薬学、3. 身体医学・衛生学、4. 外科医学、5. 内科医学、6. 医学自然史、7. 手術医学、8. 外科臨床、9. 内科臨床、10. 高等診察、11. 分娩、12. 法医学・医学史の教室が開かれておりましたが、先生様は、「身体医学・衛生学」を中心に医学を学んだと思われます。

そこで、近代精神医学の父と呼ばれ、精神病者を鎖(拘束)から解き放って治療を進めたとされるフィリップ・ピネル先生(1745-1826)の指導の下、1805年に無事、医学博士となった次第です。図版写真はラ・サルペトリエール救済院の精神病棟でのピネル先生(中央やや左男性)と解き放された女性患者たち。



先生様の学位論文は、彼が生まれ育った地域にはびこる風土病に関する問題が、主題に選ばれています。2年下には、「アヴェロンの野生児」の教育で世界をあっと言わせ、教育学や心理学、社会学などの学問の大きな進展に貢献することになった、ジャン＝マルク



実践的に、非常に意味ある存在となります。上の写真はイタルさんの「アヴェロンの野生児」の教育報告書(1801年刊行)

扉頁です。報告書の題名は、『一人の未開人の教育について、すなわちアヴェロンの若い未開人の身体的精神的初期発達について』というものですが、「未開人」というところが一般には「野生の人」とされています。文明社会の特徴を身につけていない人、という意味です。この本にイタルさんのサインが書かれていますので、ちょっと遊び心で、紹介しておきます。

話を戻しましょう。セガン親子共々深く関わり、親子それぞれが自らの道を切り開く糧としたのですから、素晴らしいじゃないですか。

先生様がパリの医学校に進んだ動機が、彼の医学博士論文の緒言冒頭の一文に次のように示されています。

「マラリア熱はこれまでしばしば研究上扱われてきた。この病気は私が医学を研究するようになった地方で、そして私が医業を開く心づもりを持った地方の近くでの風土病であるが故にこそ、私は自分の問題として検討した・・・」

ここに書かれている「地方」というのが、里子に出され、ベルトラン医師を里親として育ったドリユエス・ベル・フォンテーヌであることは言うまでもありません。この地方を含

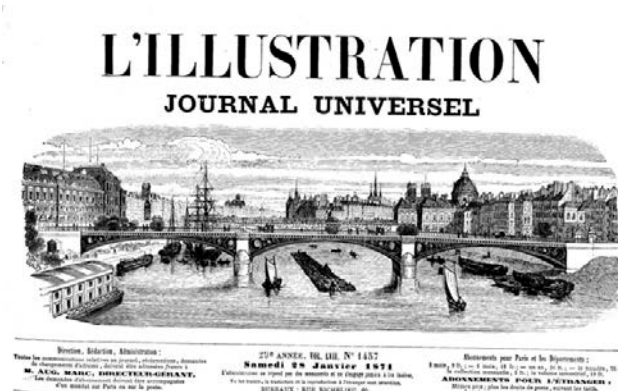
＝ガスパル・イタル(1774～1838)さんがおりました。ピネル博士もイタルさんも、セガンが生涯の課題とした知的障害や知的障害者の教育に関して、理論的に

み、生地クランジュもそして入植することを決めているクラムシーも、豊かな水源に恵まれた地域であり、特に各所から水の流れが注ぎ込むヨンヌ川は、ずーっと昔から、生活や産業用の水上交通の要路とされてきました。

「高い山もなければ海もない。しかし樫の木が豊かに生い茂るモルヴァンの森がこの地方の主産業である薪材の生産と、そのパリへの搬出のための豊かな河川を用意した」と、16世紀から18世紀のこの地方を案内する地誌学の書物があるほどです。都合がよいことに、ただ水が流れるだけでなく、溜め池が、何カ所も、自然にできていることです。

とくに、樫の木を原材料とする生活・産業用の薪材の生産と搬出は、この地方の長く語り次がれた風物詩でもありました。セガンは1841年に「^{いかだ}筏師(たち)」という小品を発表しています。後の回で詳しくご紹介します。

筏と一口に言いますが、どのくらいの大きさだと思われま
す?長さ30メートル、横5メートル、高さ5メートルなん
ですよ、概数ですけれどね。30メートルはいくつかの塊を連
結した結果の長さで、だから、この筏はtrain(トラン)とい
う名前がつけられています。くねくねと曲がりくねる河川を
運行するのですから、連結車両風にするという合理的な考え
なのですね。下の図版は『イリュストラシオン』という新聞
の1871年版のタイトルのコピーです。パリ・セーヌ川に架
かる橋のちょうど下を薪材の筏が運航中で描かれています。



どうです、大きさを実感できますでしょ?

筏製造過程を含む筏流し産業に従事するのは、クラムシー
近在の地域の老若男女、職人たち。クランジュもそうで
し、ドリュエスもそうです。そして、この筏を運航するのが
筏師です。ヨンヌ川沿いに筏師が住む集落がいくつかあった
ようですが、19世紀の初め頃、クラムシーには400人もの筏
師がいたといえます。筏一本に一人の筏師という計算ですか
ら、この産業がどれほど賑わっていたか分かります。

とくに18世紀から19世紀末にかけて、この薪材の筏産業
は、クラムシー及びその近辺の経済事情を一手に引き受けて
いると言ってもいいすぎではありませんでした。第1回で紹介
したクロード・ティリエが発行していた『ラ・アソシアシ
オン』紙上でも筏師のことをしばしば取り上げていますが、
それを読みますと、クラムシーの議会に、筏師の頭目が送り
込まれており、相当な発言力を有していたことが分かります。
時は少しくだって、1848年のフランス国民議会初の男子普通
選挙の時、地元ニエヴル県選出の代議士となるデュパンさん



が「ニエヴル県の選挙民へ」
との呼びかけをし、その中
に、わざわざ「クラムシー
の筏師へ、我が友よと言わ
せていただくが、あなた方
の労働と産業に栄えあ
れ。」との一文を織り交ぜているのです。これを見ても、薪
材をモルヴァンの森から切り出し、それをヨンヌ川岸辺で巨
大な筏に組み立て、パリに運行して、パリで薪材として売却
する、その一連の作業を統括し、かつ運行する筏師がどれほ
ど重要視されていたか、分かりますでしょ?上の写真はクラ
ムシーを流れるヨンヌ川にかかるベトレーム橋の欄干に据
えられた筏師の石像です。こうした人々をつねに襲ったのが
マラリア熱であったのです。先生様は、お父さまの薪材商の

仕事を通じて、マラリア熱の恐ろしさを知ったのでしょうか。
里親のベルトランさんから教えられたことでしょうか。

先生様は博士論文の献辞に次のように書いています。

「我が縁戚、我が師、我が一番の友、ドリュエスの外科医E.
D. ベルトラン氏へ。我が感謝の証として。あなたの生徒の
学業の最初の果実に好意的な眼差しを向けられんことを。そ
れはあなたの生徒に対して幸運と勇気の源となるであろう。」

この学位論文は、革命暦13年(1805年)フロレアル7日に
パリ医学校に提出され報告されたのでした。主査はもちろん
ピネル博士、そして4人の陪査の一人が、セガンの知的障害
教育の果実と思われる情景を名作『パリの秘密』で描いたウ
ージェーヌ・シュエさんのお父上でありました。縁は奇なも
の、ですね。

先生様がクラムシーで医業を開始したのは1808年10月29
日でした。医師ジャック=オネジム・セガンとしての活躍の
足跡は、クラムシーの監獄医、死体の検死医を務めたことを
証す書類が保存されている程度です。風土病との戦いはどう
なされたのか、残念ながら、記録されたものは見いだされて
おりません。先生様は、もちろん、個人の病人の診察もなさ
いましたし、裕福なご家庭のお抱え医師も務めました。ロマ
ン・ロランさんのひ爺さまの専属医師もなさっています。そ
の他に、クラムシーは、パリで棄て児にされ、あるいは何ら
かの事情で孤児になった子どもたちを里子に迎える里親の
街でもありましたが、里子たちが7歳まで過ごすところは施
療院・救済院でした。先生様はこの主任医師も勤めておら
れたようです。同施設は
20世紀に入って廃止され、
後、ロマン・ロラン記念館
に転用されます。記念館に
隣接してロマン・ロランさ
んの生家(右)があります。

